
世紀末探偵工藤新一

おっとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世紀末探偵工藤新一

【Nコード】

N8230I

【作者名】

おっとり

【あらすじ】

199X年。核戦争によって荒廃した世界で、新一と蘭は静かに暮らしていた。明日なき地獄で、探偵として輝いたあの頃の自分を見失ってしまった新一……。そんなある日、彼の下に一人の野盗がやって来た。殺すためでもなく、奪うためでもなく……。その野盗は依頼人だった。時代は暴力の時代。力こそが正義の無法地帯で、新一は「名探偵工藤新一」を取り戻す旅に出かける。

プロローグ

「新一！ 早く、早くー！」

蘭は満面の笑みで手を振る。新一はそれに笑顔で応えると駆け出した。今日二人は遊園地、トロピカルランドに遊びに来ている。

『もし、今度の都大会で優勝できたらトロピカルランドに連れてってやるよ』

そう言って新一がからかってやったら、蘭は本当に優勝してしまった……。いや、新一は彼女が優勝すると思っていた。彼女は人一倍がんばって練習に励んでいたし、何より新一自身が強く願っていたからだ。「優勝したら」なんて都合の良い口実だ。本当はただ、蘭と純粋にデートをしたかっただけなんだから。

しかし、新一はきつとそういう星の下に生まれてしまったのだろう。二人がジェットコースターに乗っていた時のことだ。後ろに座っていた客の首が吹き飛んだ。事件は名探偵を呼ぶというのか？ 毎度毎度、事件現場に行つては目の当たりにする非日常の出来事……新一はうんざりしたようにため息をついた。まあ、事件を推理するのは楽しいから良いんだけど……と、ちよつと不謹慎なことを考えながら。しかし、その時はまだ、これが非日常の光景だった。蘭などブルブル震えて泣くしかできないほどの……こんな光景一生に一度見るか見ないかというものだった。しかし、全部変わってしまった。世界とは理不尽で、どうしようもなく馬鹿げているのだろう。

それは、新一がジェットコースター殺人の推理を始めようとした時のことだった。

「た、大変だ！ 皆今すぐ逃げるんだ！」

客の一人が大声を出した。新一も警察も容疑者達も、何事かとその客の方を見る。次にその客が放った言葉に、皆最初は耳を疑うしかなかった。本当に、目の前で人の命が奪われたというのに、それすらどうでも良くなってしまうほどの一言だったのだ。

「核弾頭を搭載したミサイルがこっちに向かってるんだ！ ついに始まっちゃまったんだよ、核戦争が！」

「な、何だと!？」

警視庁捜査一課の警部、目暮の顔が真っ青になるのを見ながら新一は思い出す。確かに、最近のニュースではきな臭い国際情勢が毎日のように取り沙汰されていた。新一はそんなもの別世界の話だと思ってたが……。

「新一君！ しっかりするんだ！」

新一はその言葉で考え事の世界から連れ戻された。新一と蘭は目暮に手を引かれるまま走っていた。少し離れた所にある一台の車……目暮の愛車だ。目暮は乱暴に二人を車に押し込み、普段は出さなほど大きな音をたててエンジンを吹かした。車は猛スピードで走り出す。

「シェルターがある！ 君たちだけでもそこに避難するんだ！」

普段は新一たち探偵に頼ってばかりの情けない男だったが、やはり彼も市民を守るために警察になったのだらう。こんなときに一番冴えている。だけど、こんなときだ。冴えていればいるほど、冷酷

な判断をしなければならなくなる……。

「待って……お父さんは？ お母さんは？」

蘭が思い出したように呟いた。新一は目暮の顔を見る。唇から血が滴っていた。

「すまん……！ 時間がない……！」

目暮はそう言うと同時にブレーキを踏んだ。シートベルトもしていなかった新一と蘭は前のめりになってシートにぶつかる。でも痛み体を手でさする暇も与えられない。二人は目暮に車から引きずり下ろされ、シエルターの入り口であるエレベーターに放り込まれた。尻餅をついた二人に、目暮は悲しげな……それでいて優しい瞳を投げかける。

「生きるんだぞ。きっと辛い時代になるだろうが……」

「待ってください！ 警部はどうするんです!?!」

シエルターの扉が閉まり始めたのに目暮はまだ外にいる。新一は慌てて目暮に声をかけた。

「市民を外に放り出して自分だけ避難など……部下達に示しがつかんよ。なに大丈夫、すぐ行くさ」

「そんな！ もう時間が……！」

手を伸ばすが無情にも扉は閉まる。そしてエレベーターの下降音が響いた。

「いやあああああああああああああ！」

蘭はやっと放心状態から開放され、悲痛な泣き声をあげた。一体どうして……どうしてこんなことになってしまったというのか？

新一は自問するが、答えは見つからない。

あんなに楽しかった日々が……高校生探偵として活躍した新一の青春が脆くも崩れ去ったのは、西暦199X年。時はまさに、世紀末だ。

第1話 甦る名探偵とトリックなき荒野に謎を見よ

あの核戦争は、世界を全て焼き尽くしてしまった。海は枯れ、地は裂け、あらゆる生命体が死滅したかに見えた。いつそ、一つ残らず灰にしてくれた方がどれほど良かったことか……。

こんな荒廃した世界でもまだ、新一と蘭は生きている。シエルターを出てすぐ、荒野のど真ん中で二人は永遠の愛を誓い合った。本当は、夜景の見えるレストランでプロポーズするはずだったが、それが荒野に変わってしまったことは、新一にとって今や笑い話ではない。

「新一、お水汲んで来て」

荒野の一軒屋に、蘭の元気な声が響いた。

「おう……」

新一はうつむきかげんに応える。蘭は数少ない食材を使って今日の夕飯を作っているところだった。コナン・ドイルも江戸川乱歩も全部燃えてしまったこの世界では、楽しみと言えば蘭の作った料理ぐらいだ。きつとそれに必要なだろう……と、新一は腰を上げ、家の脇に掘った井戸の所に水を汲みに出た。彼が掘り当てた井戸だ。事件解決の助けにするため学んだ知識も、少しは役に立ってる。それのおかげで、こうして荒野でも喉を潤すことができているのだから……。

まあ、そうした知識がなくてもこの荒野では生きていけるのだが……。どうやって？ よくある例が……。

「ヒヤッハー！ 水だぁー！」

「あんな所に井戸があるぜえー！」

「オラオラ、兄ちゃん！ その水をよこさねえと殺しちまうぞおー！」

略奪だ。

野盗たちは、この荒廃した世の中を皆で協力して生き抜こうという考えは持っていないらしい。とりあえず法律もないから好き勝手暴れまわっているのだ。今日は多分、喉が渴いたのだろう。で、ここに井戸があるからそれを奪う、と……。実に単純で野蛮な考え方だと思わないかねワトソン君？ 新一は頭の中でホームズを気取り、フツと笑う。そして、野盗の方に向き直った。

「まったく……仕様がねえなあいつら……」

新一はこの間物々交換で手に入れたサッカーボールを取り出すと、それを地面に置いた。そしてバイクで突進してくる野盗の顔面めがけてそれを蹴る。

「ぶぎやあー！」

一人撃退。跳ね返ってきたボールをオーバーヘッドでもう一度蹴る。

「どわあー！」

「おげあー！」

「ヒュ〜！ ダブルでゲットだ。こりゃすげえ！」

新一は地面に突っ伏した3人の野盗を見つつ、懐かしのカズダンスなんかを踊ってみた。が、それはこの荒野において勝者の舞ではなく、「油断」と言う名の愚行でしかなかった。新一がふざけているうちに野盗の一人が立ち上がった。

「この野郎……！ 死ねえ！」

野盗はボウガンを取り出すと、その鋭い矢の先を新一に向けた。ギリリと光るその先端に恐怖し、新一は咄嗟に身を伏せる。全身の毛が逆立ち、痛みと、その先に待ち構える死を想像して身を固めた……が、次の瞬間聞こえてきたのはボウガンの発射音ではなく、いつもの聞きなれた声だった。

「死ぬのはあんたよ、このモヒカン！」

「あん？ だばあ！」

見上げると、蘭の強烈な蹴りが野盗のあごを砕いていた。それどころか、仲間の悲鳴で意識を取り戻し起き上がった残りの野盗にも拳を突き入れる。骨が砕ける音が荒野に響いた。倒れた野盗たちはもう動かない。

「もう、新一っいたら……気絶させたって捕まえてくれる人なんか、もういないんだからね！」

蘭は呆然としている新一を叱り付けるように言った。彼女の空手は日に日に殺傷能力を増している……。あの日泣きじゃくることしかなかった蘭は、もうどこにもいやしない。まるで肝っ玉母さんだ。

「ま……優しい新一が好きなんだけどね」

蘭はそう言つて新一の頬つぺたにキスをすると、そのまま夕飯の支度に戻つた。新一にはその背中が異様に大きく見えた。昔はあんなに華奢だったのに……守つてやらなきゃいけないと思つてたのに、今じゃすっかり立場逆転。推理力なんて何の役にも立ちやしない。今の世の中力がなければ生きていけない、暴力が支配する世界なのだ。その点、蘭の空手の方が需要が大きい。イカれた時代へようこそ……。タフボーイたちは戦い、そうでない者達は震えて涙を流すことしかできないのだ。

そんな世界で新一は完全に後者だった。時代は探偵を求めない。人を殺したければ殺せばいい。トリック？ アリバイ？ 必要ない。「ヒヤッハー！」と叫んで斧でも振り下ろせばそれでいいのだ。目撃者がいてまずいなら目撃者も殺せば良い。目撃者が多いなら村ごと燃やせば良い。食料と水は持つていくけどな……。ヒヤッハー！ そんな時代に探偵など……。世の中以上に、新一自身が自覚していた。それを自覚してしまつたから、彼は完全にくすぶつていた。

しかし、そんなある日のことだった。もうそろそろ夜も明けると言う頃……。静かな二人の家にけたたましいノック音が響いた。

「おい、クドウ・シンイチ！ いるんだろう？ 開けやがれー！」

何とも乱暴な言葉が扉越しに放たれる。新一と蘭は強制的に眠りを中断させられ、不快感と共にその体を起こした。

「くそッ！ 開けねえなら勝手に開けてやるぜ！ オラあ！」

バキリと音を立てて二人の家の粗末な扉が碎け散る。そこに現れ

たのは斧を持った野盗だった。その姿を確認すると、蘭はすばやくベッドから飛び出して身構える。

「このー！ 人ん家の扉に何してくれるのよ！」

「ああん？ 何だこのアマ！ てめえなんかに用はねえ！ 俺はクドウ・シンイチに用があるんだ！」

「新一を殺す気ね！？」

「ちげえ！ 依頼しにきたんだ、コラ！」

途端に、新一と蘭の目が点になる。

「……依頼？ 何の？」

蘭は思わず聞き返した。

「あん？ その野郎は名探偵のクドウ・シンイチじゃねえのか？」

「いや……そうだけど……」

「だったら調査の依頼に決まってるだろうが。ぶつ殺すぞ！」

蘭は啞然とした。この世紀末に、まだ「探偵」という存在を覚えている者がいたとは……。そんな蘭を見て、彼女と話していても仕方ないと踏んだのか、野盗は無理矢理部屋に押し入り新一の前までやってきた。

「大変なんだ名探偵！ 大事件だ！」

野盗は新一の両肩を手で掴んで揺さぶりながら話す。新一はあまりに久々の依頼に、まだ呆然としていた。しかし野盗は構わずに続ける。

「殺人事件だ！」

「いつものことじゃない……。何言ってるの？」

蘭が茶々を入れる。いや、実際その通りで……。この世紀末において、人が死ぬことなど事件でも何でもないのだが。しかし、野盗は大きく首を横に振る。

「ちげえんだ！ ただぶつ殺されてるだけじゃねえんだ！ 俺の、俺の仲間が……。皆変な死に方してんだよお！」

野盗の声が一気に震えだす。顔中に恐怖の色が現れていた。余程恐ろしいものをみたのだろう……。先ほどまで敵意を露にしていた蘭も、この様子に思わず野盗をなだめる。しかし、野盗は取り乱すばかりだった。

「頼むよ名探偵！ この事件の謎を解いてくれよ！ 怖くて怖くて、夜も寝れねえんだ！」

普段の行いが悪いせい……。自業自得だ……。蘭は呆れてため息をつくと、どうしたものかと新一の顔を見た。

「あ……。あれ？」

気のせいか……。新一の顔がキラキラしていた。

「良いでしょう。その謎、この工藤新一が解いて差し上げますよ。」
いつのまにか背筋がピンと伸び、どこかキザな工藤新一がそこにいた。

「え？ ちょ……新一？」

「ヒヤッハー！ さすがは平成のホームズだぜ！」

「それでは野盗さん、現場に案内してもらえますか？」

「おう！ 俺のバギーに乗ってくれ！ それと俺の名はジムだ！」

「ちょ……新一！？ 何言ってるの！？」

蘭の言葉が聞こえていないのか、新一はジムのバギーに飛び乗る。次の瞬間、豪快なエンジン音が日の出直前の冷えた空気を切り裂いた。

「ヒヤッハー！ 推理だぁー！」

「ヒヤッハー！」

「新一く！？」

バギーはちょうど昇り始めた太陽の光の中に吸い込まれていく。取り残された蘭は慌ててその後を追った。慌しく、ハチャメチャで……どこか懐かしい朝だった。

第1話 甦る名探偵とトリックなき荒野に謎を見よ（後書き）

ヒヤッハー！ 世紀末だー！

ってことで、最近やたらと思いつく世紀末ネタ。

発散する場所がなかったので、気晴らしに新作を書いてみました。といっても、別の小説のおまけネタを本格化しただけですが……。

うん、すみません。

反省してますし、ちゃんと完結させるんで許してください。
お願いします。

……ん？

誰だ、今「許さん」とかほざきやがったのは？

てめえか？

何だてめえは？

あん？ 「ホクト」だあ？

ふぎけやがって！

死にやが……が……ががが……

がめらッ！

第2話 名探偵よ、地獄の推理やってみるか！

先ほどまでの輝いた表情が一変……目の前の惨状に新一は思わず吐き気を催した。

「じ……これは……」

ジムに連れてこられた場所で、おびただしい数の野盗が死んでいた。地面は血で真っ赤に染まっている。一帯に広がる腐乱臭につられたのか、カラス達がちらほらと集まってきていた。この世紀末になって、いよいよ人の死に慣れてしまっていた新一ではあったが、あまりの光景に初めて死体に直面した日のことを思い出した。頭から血の気が引き、まるでモノクロ映画の中に入ってしまったかのように、視界が色を失った。「推理」などはしゃぐ気にもなれない。息をするのも忘れて、ただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

「新一〜！ まったく……待ちなさいよ……！」

そこに遅れて蘭がやって来る。

「うえっ！ 何これ……！」

それが蘭の第一声だった。昔の彼女なら「きゃあああああ！」だったのだろう……。もうすっかり肝も据わったので、そんな女々しい反応は見せない。少しだけ顔をしかめながら死体を凝視する。

「変ね……どいつもこいつも、まるで内側から破裂したみたいに死んでるわ」

いく分冷静だったためか、本来なら新一が最初に気づくべき点を蘭が指摘した。それを聞いて、ジムは大きく頷く。

「そうなんだよ姉ちゃん！ おかしいだろ？ 俺の仲間は風船じゃねえんだ」

「小型の爆弾とかでも埋め込まれたんじゃないの？」

「おいおい、このご時世だぜ？ そんな精巧な武器が残ってるもんかよ。いや、残っていたとしても見るよ、死体の数を！ これだけの人数相手に、気づかれずに爆弾を体に埋め込む？ もし俺にそれだけのことをする力があつたら、最初からぶっ殺してるぜ」

「それもそうか……ということは、何らかの方法で『最初からぶっ殺した』のね……」

蘭とジムは「うーん」と唸って首を傾げる。そこからはずっと沈黙だけが漂うばかりだった。誰一人、言葉を発しない……。しかし、あまりに言葉が無さ過ぎたので、蘭はそれに気がついた。

「新一？ さつきから何もしゃべってないけど大丈夫？」

蘭が話しかけても、新一は死体の山を見つめたまま硬直している。いつものように推理の世界に……というわけでもなさそうだ。蘭は、今度は手で揺さぶりながら強めに声をかけた。

「ちよつと！ 聞いているの新一！」

そこでようやくと新一は反応した。

「あ、ああ悪い……ん？ 蘭、いつの間に来たんだ？」

その何とも間抜けな一言を聞くと、蘭は大きくため息をついた。

「ちょっと、何びびってんのよ新一！ この謎を解くんではよ？」

「そつだぜ、頼むぜ名探偵！」

新一は苦笑いするしかなかった、どうやら探偵としてのリハビリが必要らしい。

さて、とにかく死体を調べてみないことには始まらない。まだ若干頭が混乱気味だが、新一はかつての自分を思い出しながら一つ一つ調べていくことにした。

「破裂したような傷口以外、大した外傷は見当たらないな……。死体の硬直具合、腐敗具合から言って、だいたい死後二日ってところか……」

だが、詳しいことはよく分からない。ならば犯行時の様子はどうだったのだろうか？ 新一はとりあえずジムの話を聞いてみることにした。

「ジムさん、あなたが彼らを発見したのはいつですか？」

「気持ちワリいな、『さん』はよしてくれ！」

ジムは首筋をぼりぼり搔きながら続ける。

「昨日の夕方だぜ。それまでは別行動をとってたんだ。南にある村を襲ったあと、俺のバギーだけ調子が悪くなっちまってな。置いて

けぼりをくらった。で、修理をし終えてから合流してみりゃこれだ」

「最後に生きている彼らを確認したのは？」

「こいつらと分かれた時だから……五日前だ。その後こいつらがどうしていたかは知らねえな。俺がここに来たのも、いつもの合流ポイントだってだけのことだからな」

「うーん……手がかりなしか……」

死因も分からない上、犯行時の様子も闇の中……。ならば被害者の人間関係から容疑者を絞れないだろうか？ 新一は考える。こんな殺し方だ……。被害者に強い恨みを持っていた可能性もあり得ると、仮説を立ててみたが……。

「恨みを持つてる人なんてたくさんいるでしょ。こいつら、野盗なんだから」

「ヒッシャー！ 心当たりがありすぎるぜえー！」

蘭の言うとおり、キリが無くなる。

それにしても、捜査開始からいきなり行き詰ってしまった。何にせよ情報が少なすぎる。こんなとき警察や、特に鑑識官がいれば、少しは情報も増えただろうに……。新一は目暮やトメさんのことを思い出した。しかし、彼らはあの核戦争で皆死んでしまった。そして彼らがない今、自分だけの力ではどうにもならない。探偵というものは色んな人たちに支えられてようやくと探偵だったのだと、新一は今更ながら気づかされた。

「ちっぽけだな……」

新一は呟く……。しかし、その背中を蘭がバシンと叩いた。

「だったらみんなを頼りなさいよ。三人で考えてもどうにもならないなら、もつとたくさんの人の話を聞けば良い……そうじゃないの、ホームズ君？」

そう言っただけで蘭はニツと笑って見せた。何ともたくましいワトソン君だ。新一は今の自分ごとことん情けなく見えた。そうだ、あの頃の工藤新一はヒーローだった。だから皆自然と力を貸してくれたのだ。それなのに、今の自分ときたらどうか？ 取り戻さなくてはならない……新一は自分に喝を入れるように背すじを伸ばし、胸を張った。そしてはつきりした口調で言い放つ。

「オアシスに行こう！ あそこなら人も集まる分、情報も多い。これがたった一度の犯行だったなら、何も分からないかもしれない……でも、もし他でも同じような殺し方をしているとしたら……」

「なるほど、俺らの知らない情報を見つけ出せるかもしれない……よし、そうと決まれば出発だ！ 名探偵、姉ちゃん、とつとつとバギーに乗ってくんない！」

ジムは意気揚々とバギーのエンジンを吹かす。調子の良いモヒカン野郎だ……。新一と蘭は一瞬見詰め合い、フツと笑うと、勢い良くバギーに乗り込んだ。

「よーし！ しゅっぱーつー！」

ブスン……と、音がしてバギーのエンジンが停止した。

「あ、いけねえ、また故障だよ……」

「大丈夫なんですよ……」

三人がオアシスに向けて出発したのは、それから二日後のことだった。

第2話 名探偵よ、地獄の推理やってみるか？（後書き）

ヒヤッハー！ 第2話だぁー！

にしても、新一がヘタレすぎてどうなんだろうと思いました。
まあ、これから徐々にキザでイナセなしんいつつぁんに戻る予定です。

この物語は新一が輝きを取り戻す物語……ってことになんてい
るだけだぜ。

別に後付けで考えたわけじゃ……後付けです！

とりあえずモヒカンとかバギーとか肩パッドとか描きたかった
だけです！

本当です！

な……なぜだ……。

く……口が……勝手に……。

くそ！

この野郎くてめえ、何をしやがった！？

ふぎけやがって、殺してや……

やんまあ！

第3話 七つの傷の男〜お前は救世主なのか？〜

それは、この世紀末の世において幾度も繰り返されてきた光景。荒野のど真ん中を、砂煙を巻き上げながら一台のバギーが猛スピードで突き進む。そして、その後ろを無数のバイクが追っていた。

「ヒヤッハー！ 待て、コラぁー！」

「くそ……！ しつこい野盗共め！」

バギーに乗っているのは4人家族。バギーのハンドルを握る父親の手に汗がにじんだ。どこまで行っても野盗達は追いかけてくる。血走った眼は4人を捉えたまま、狂気にギラついていた。

「しまった……！ う、うわぁぁ！」

必死に逃げていたが、ついにタイヤが岩につまづき、必死に体勢を立て直そうとしたのも虚しくバギーは横転。野盗達に追いつかれてしまった。

「みんな！ 逃げるんだ！」

父親が痛みでうずくまる家族を抱き起こして走り出す。しかし、逃げ切れる訳も無い。彼らの背中を、野盗たちはしばらくニヤニヤ笑いながら見ていた。そしてそのうち、一人の野盗が鎖のついた鋼鉄の塊を取り出し、それをブンブンと振り回した。よく狙いを定め、遠心力に任せてそれを放つ。

「ぐあああああぁー！」

ボキリと、骨が砕ける音……。同時に、父親が悲鳴を上げて地面に倒れる。

「あなた！ あなたあ！」

「うわあああ！ 父さあーん！」

「うう……逃げろ……」

すがりつく家族に最期の言葉をかけ、父親は事切れた。二人の子供の目からは大粒の涙がこぼれる。母親も同じだった。しかし、もう子供達を守るのは自分しかない。愛した夫を置き去りにするのは嫌だったが、子供達の手を取り立ち上がる。

「馬鹿が！ 逃げられると思ったか？」

野盗の声がして、母親が周りを見回してみると、3人は既に取り囲まれてしまっていた。

「お、お助けください！ 水も食料も全て差し上げます！ ですからどうか命だけは！」

母親は地面にひざまずいて命を乞う。しかし、野盗達は下卑た笑い声を上げるばかりだった。

「ああ……水も食料も頂戴するぜ。だがな、お前らは死ぬ」

「な！ そ……そんな！ なぜですか！ なぜこんな！」

「なぜだあ？」

掴みかかってきた母親を野盗は殴り飛ばす。そして地面に倒れたその体を、さらに足蹴にしながら言い放った。

「お前らのような奴の生き死ににいちいち理由なんぞいるか！俺たちは殺したいから殺してんだ！ゴミクズは為すがままにされてれば良いんだ！ヒヤッハッハッハッハッハッ！」

「そうか……ではまず、お前から死ね」

「あん？ おふっ!?!？」

突然の言葉に驚いて振り返ったところで、野盗の額に指が突き刺さった。目の前には見知らぬ男が立っている……。

「何だ、てめえは？」

「知ってどうする？ これから死ぬお前が……」

「なんだと？ 何をほざきやが……が、がる……がるうらッ！」

男が指を引き抜いて数秒後、野盗の体は砕け散った。驚いた他の野盗達も一斉に襲い掛かるが、すぐに同じ運命。荒野の土が真っ赤に染まった。母子3人は、ただ呆然とその光景を眺めていた。野盗が全員ただの肉塊に変わるまで……。そして、全てが片付いた時、ようやく母親は口を開くことができた。

「あ、ありがとうございます……」

「ここから西に10キロ行った所にオアシスがある……そこなら安全だ」

男はそれだけ言うと砂漠に向かって一人歩き出した。母親は男の名前すら聞けなかったが、ただ、男の胸にあった七つの傷が、網膜に焼き付いて離れなかった。

それから3日後、3人になってしまった家族はオアシスで傷ついた体と心を癒していた。まだ父親の死に対する悲しみは消えていないが、しかし、生きる気力は大分戻って来た。塞ぎこんでいても始まらない。母親は物々交換で新しい物品を手に入れようと、広場に繰り出すことにした。旅先で手に入れてきたあれやこれやを、食料などと交換していく……。と、その時だった。若い男女と野盗風の男が声をかけてきた。

「あのすみません……お尋ねしたいことがあるのですが」

「は、はい……なんででしょうか？」

母親は足を止めて3人組の方に向き直った。すると若い男……新
一が話を切り出した。

「変な死に方している人を見かけませんでした？」

「はあ？」

突飛な質問だったので、母親は開いた口がふさがらなくなってしまった。

「ですから、普通では考えられないような死に方をしている人を見かけませんでしたか？ 野盗とかで」

「な……何なんですか、一体？」

こちらら夫が死んで間もないと言うのに、「死」の話などしたくもない。と、母親は顔をしかめて見せた。それを見ると、新一も漠然と事情を察したのか口を閉ざしてしまった。そして「すみませんでした」とそれだけ言って、その場を立ち去ろうとする。が、その肩を蘭が捕まえて止めた。そして、新一に代わって目の前の女性との話を始める。

「気の乗らない質問だったらごめんなさい。でももし有力な情報を頂ければ、私達の食料を少し差し上げます。何かご存知じゃないですか？」

いきなり出てきて何なんだ？ と、母親はさらに顔をしかめる。が、口を利くだけで食料が手に入るなら安い取引だ。夫の死は悲しいが、今まさに生きてお腹を空かせている子供達を守るのが自分の使命……。母親はそう思い直すと、記憶の糸を手繰り始めた。変な死に方……と、その時、頭がズキンと痛んだ。嫌な記憶と同時に、それは鮮明に思い出される。そうだ……よくよく考えて見ると不思議な男だった。自分達を助けてくれたあの男は、ほぼ触れただけで野盗共を肉片に変えてしまったのだから。

「胸に七つの傷……」

母親は呟き、そしてさらに続ける。

「胸に七つの傷を持つ男が、30人以上いた野盗を一瞬で倒してしまいました。その男が触れただけで、野盗達の体が弾けてしまったんです。そう、まるで風船を針で突いて割ったように……」

新一達はそれを聞くとハツとした。オアシスに来て数日、探し求めていた情報が目の前にあるのだ。

「それはいつ？ どこで見たんですか？」

「3日前……ここから東に10キロの所です」

「他には？ その男のことで何か覚えていることは？」

「いえ……あまりのことに呆然としていましたし、名前も言わずに行ってしまったから……」

しかし、それでも一歩前進だ。新一達は約束通り女性に缶詰を渡すと、とりあえずその現場に行ってみることにした。すぐに東に向かって、ジムのバギーを飛ばす。しばらく行くと……ああ、同じだ。空にはカラス達が飛んでいて、ギャーギャーと不穏な声を上げていた。

続く

第3話 七つの傷の男〜お前は救世主なのか?〜 (後書き)

ヒッハー！ 久々だぁー！

つてことで、長らくお待たせいたしましたして申し訳ありませんでした。
「遺憾の意」を発動したいと思います。

反省はまったくしてないけどなぁ！

ハッハー！

俺にも色々と事情があるんだよ！

分かったかふはぁッ!?

な、何しやがる!?

放せ！ は……放してください！

……ふう。

まったく、一体なんだって……てい……

ていえむぁッ！

第4話 その名はトキー〜悪魔になった奇跡の男〜

七つの傷の男……。彼こそが、新一達の探し求めている人物である可能性が高い。女性に言われて向かった現場は、最初に新一達が見た現場をそのまま持ってきたかのような有様だった。しかし、最初の現場同様、死体からは何も見つからず、収獲といえば犯人の胸に「七つの傷」があるということぐらいだった。

そしてそれから数日後……捜査の進展がない中、新一達はとある村までやってきていた。

「……という感じで、触れただけで内側から破裂するように死んでしまうそうなんです、どなたか心当たりはないですか？」

とりあえず、知っている限りを話し、新一達は村人から情報を募った。しかし、村人達は「にわかに信じられない」と首を横に振るだけで、何も知らないようだった。ところがその時、一人の旅人が呟いた。

「指で触れるだけで病気を治せる男なら知っているんだが……」

「え？ 病気を？」

新一はその話に食いついた。

「ああ、俺のいた村は怪我人や病人などの、足手まといになる人間が捨てられていく場所だったのだが、ある日その村に一人の男が現れたんだ。その人の名前は『トキ』」

「トキ……？」

「そう……。彼が触れた人間はたちまち元氣を取り戻し、死を待つだけだった村は蘇ったんだ。格言う俺も、病に苦しんでいたところをトキ様に救っていただき、こうして旅ができるまでに回復したんだからな」

「で？ そのトキって人の胸に『七つの傷』とかは？」

「さあ……。服を着ていたから」

しかし、新一はそのトキという男に会ってみたくなかった。殺す者と、治す者……。七つの傷の男とは違うのかもしれないが、しかし触れるだけで人を殺す術を知っているかもしれない。それにこの暗黒の時代に光を灯すその男なら、かつての自分の輝きを取り戻してくれそうな気がしたからだ。

旅人の男に村の場所を聞いて、新一達はさっそく旅立った。長い旅路……。ただ、今までの荒野の旅とは少し違った。どこかワクワクできる、小学生の頃の遠足を思い出させるような期待に満ちた感じ……。それは10日ほど続き、新一達はようやく旅人の言っていた村……。「奇跡の村」の近くまでやってきた。

その少し前、男の顔は恐怖と苦痛で歪んだ。

「と……。トキ様！？ 一体何を……」

「新しい『秘孔』の究明だ……。どれ、この秘孔から試してみるか」

ベットに縛り付けられた男に冷たい視線を投げかけると、「トキ

様」と呼ばれた男は、おもむろに人差し指を男の体に突きたてた。

「ぐ、ぐあああああああああああああ!?!」

男の体に電流が流れたような衝撃が走る。あまりの苦痛に男は言葉にならない声を上げ、必死にトキに助けを求めるが、しかしトキはその様子をまるで観察するかのようになり、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべながら眺めているだけだった。

「どうだ？　どんな感じだ？　んん〜？」

「ひ、ひいいいいい!」

悲鳴がしばらく続き、その後にグシヤリと肉がちぎれる音がした。男の手が弾けとんだのだ。

「ぎゃあああああああああ!」

それだけではない。男の体は徐々に崩壊し始めていた。崩れいく男を見ると、トキはその拘束を解き、満足気に笑った。

「そうか、大体の効果は分かった……お前はもう帰っていいぞ」

「う、ふあああ!　はああ……!」

男は逃げるようにその場を去った。しかし、トキはその背中に一瞥もくれない。もう、男に対する興味は無く、頭の中は次の「実験」のことでいっぱいだった。

「次の木人形デウを連れて来い……」

部下にそう命じる……。

一方の男は、体の痛みにも必死に堪えながら走っていた。体のあちこちがどんどん爆ぜていく……。もう自分の死は間近だ。ならばせめて、この村のことを誰かに伝えなければ……。そう思って、必死に走った。

「お、何だ、人がいるじゃねえか……。おい、おっさん！　ここは奇跡の村で間違いないか？」

目の前に野盗風の男と、連れと思われる若い男女が現れた。どうやら奇跡の村の噂を聞きつけてきたらしい。ダメだ！　逃げるんだ！　男は声の限り叫んだ。

「ここはもう奇跡の村じゃない！　トキ様は変わってしまったわ……。たはらッ！」

「な！　なんだあ！？」

目の前でいきなり男がバラバラになってしまったので、ジムは腰を抜かしてしまった。新一と蘭も、顔が恐怖の色に染まる。ここに来るまでにあつた期待感も希望も、男の体と一緒に砕け散ってしまった。一体何が？　ここは奇跡の村ではないのか？　3人はしばらく、ただ呆然としてしかできなかった。

「ようこそ奇跡の村へ……」

ジャリッと、砂が踏みしめられる音と同時に、聞いただけでは歓迎と受け取れるその言葉が放たれた。しかし、新一達3人を取り囲んでいたのは、厳ついヘルメットとアーマーを装着した男達だった。

「何だてめえらは！」

「トキ様がお待ちだ……一緒に来てもらおう」

ジムの言葉を無視するように言うと、男達はジリジリと3人に詰め寄ってきた。しかし次の瞬間、雄叫びと共に蘭の空手が炸裂する。

「しっかりしてよ2人とも！ 逃げるのよ！」

蘭が叫ぶと、新一はバギーに飛び乗ってエンジンをかけた。蘭も腰が抜けたままのジムを無理矢理起こし、急いでバギーに向かう。が、バギーに乗り込む前に、強い衝撃が二人を襲った。突然現れた男に殴られたのだ。

「逃がしはしねえぜ！ この俺は昔、総合格闘技のチャンピオンだった。その上、トキ様の秘術により力が数段アップしているんだからな！」

男は倒れた蘭とジムに、パウンドを浴びせようと拳を振り上げる。が、突然響いたバギーのエンジン音に驚いて、その手を止める。見ると新一がバギーで突進してくるところだった。

「チイツ！」

男は急いで飛び退き、それを回避した。その隙に新一はバギーを、蘭とジムの横に付ける。

「蘭、乗れ！」

「新一！」

蘭はジムを放り込むと、自分もすぐにバギーに飛び乗った。それを確認すると、新一はアクセルを目一杯踏み込む。

「……………！？」

しかし、バギーは発進しなかった。いくらアクセルを踏んでみても、タイヤの回る音が虚しく響くばかり……。

「逃がさねえってんだろぅが！」

それもそのはず。総合格闘技チャンピオンの男が、バギーを掴んで持ち上げていたのだから。

「ひええ！？ なんて馬鹿力だ！」

「このまま地面に叩きつけてやる！」

男の筋肉がギシギシと唸り、バギーが傾いた。が、その瞬間……男は後頭部に強い衝撃を受けた。

「ぐはっ！？」

「バギーを下ろしてください」

突然現れたもう一人の男が飛び蹴りを放ったのだ。その男は流れるように、トーンと地面を蹴って高く飛び上がると、最初の一撃でふらついた格闘技男の顔面を「とどめ」と言わんばかりに踏みつけた。そしてそこからピョンと、バギーに飛び乗る。

「出してください」

「あ、ああ……」

男に言われて、新一は再度アクセルを踏む。格闘技男が気絶してしまつたため、今度はうまく発進することができた。他にいたヘルメット男達はその行く手を阻もうとするが叶わず、逃げ去っていく。新一達が巻き上げる砂埃を被りながら舌打ちをするのだった。

続く

第4話 その名はトキ〜悪魔になった奇跡の男〜（後書き）

ヒッパッハー！連日投稿だぁー！

つてことで、久々に2日連続で投稿しました。
今回はお待たせせずすみましたね。

やったねたえちゃん！

え？

このペースを維持しろ？

うるせえ！俺は忙しいんだよ？

え？

一分でも休載したら「ボン！」だと？

何言ってやがんだ……。

余計に休載してやりたくなつた……ぜぶらッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230i/>

世紀末探偵工藤新一

2010年10月10日00時07分発行